

# 自分史

FROM STREET MOVIE KIDS  
FOR THIS CITY



★映画をつくってみたい!  
フツーじゃない映画をみたい!!

そんなあなたに贈る 自主製作映画の  
情報紙 ●●

VOL. 1

(映画は自分史です) 大林宣彦  
インタビューコーナー

シネサラダスタッフは怖い物知らずなので、いろんな人にお手紙を出して、アンケートをお願いしていたのですが(本当に勝手ですね)、ナント!あの大林宣彦からお返事が届いてしまいました!  
本当に有難うございました。以下はその内容です。

Q 自主映画を撮っていた時、苦しい事はありましたか?もしおありでしたら、どのようにしてそれを解決されましたか?

A 最新作『北京の西瓜』をはじめ『おかしなふたり』『現形』『転校生』など、僕の映画の多くは、今も自主映画です。逆に8ミリ映画時代も自分をアマチュアだと考えた事はなく、いつでも映画史の中での自分のポジションを確認しながら映画を作ってきました。苦しい事といえば資料集めから上映場所を定めるまで苦戦の連続ですが、何ものにも左右されない自由を思えば自主映画が一番です。

Q フィルムはどの様な物を使用していましたか?

A 少年時代は家庭用活動写真機の35ミリ、9.5ミリ、青年期は8ミリ(8サイズ)、いまは16ミリ(『現形』『北京の西瓜』)、スーパー16ミリ(次回作『はるかノスタルジイ』)それに35ミリ、70ミリなど。

Q 自主映画の上映について(方法・形式・会場 etc)どの様な形が望ましいとお考えですか?

A 原則的には自主上映、見たい人に、見たい時、見せたい時、見る事ができる、自宅に映写ルームを持つのが理想です。作品の性質によっては劇場での公開も良いでしょうが制約は多くなります。今は作る事より上映する事の方が困難な時代です。

Q これから映画を撮ろうと考えている人に、何かひとこと願います。

A 映画に対する考え方は、人生と同じで、ひとそれぞれにさまざまです。  
僕の場合は、いつでも自分史として映画を作ります。自分の生きた証として、僕という人間をいざばん正直に表現できるのが映画だと考えています。  
いずれにしろ映画を作る事で、自分も、自分の大切な事も豊かになるという事が原則でしょう。  
映画は人生の一部であり、すべてでもあります。そのバランス感覚が、映画に対する、いわば礼儀であるでしょう。

## 編集後記

シネサラダでは、自主映画に関する情報を募集しています。こんな映画をつくってみたい!その他、質問や愚問 etc を募集しています。  
~右のあて先まで、ドシドシ送って下さい。お待ちしております!~

▶3月にはシネサラダ特選『仙台自主製作映画セレクション』上映会があるかも!おたのしみ!

● ※、映画を作っている人(自主映画)に向けて、何か一言お願います。  
A 世の中のこと、何でも映画になります。同時に、だからみだりに映画をもて遊んでもいけません。映画にすることというのは、そのものと自分が関わる、ひとつの意志を表明することです。だから僕等が映画を作るつもりでいても、つまりは映画が僕等を作ってくれるのです。  
映画とは偉大なものなのです。映画と関わり続けられる事ほど誇らしく幸福な事はありません。  
映画に“ありがとう”それだけです。

P.S. 皆さんの映画に出会える日を楽しみにしています。

「自分史」の発行を機に、自主映画界の現状を調査し、その結果をこの情報紙に掲載する。調査は、自主映画界の現状を調査し、その結果をこの情報紙に掲載する。調査は、自主映画界の現状を調査し、その結果をこの情報紙に掲載する。

おくづけ  
平成 2年 2月 11日 (日) 発行  
編集: 幸田邦良 岸浪清史  
斎藤拓生 遠藤喜一郎  
発行所: シネサラダ  
〒 岸浪 清史  
TEL (PM 9:00 前までに)